



関ヶ原軍記大全
十九
二

リ 5
9727
3



冥个原軍祀大全卷九
卅九

冥个原軍祀大全卷九
卅九
冥个原軍祀大全卷九
卅九

門 11 5
號 9727
卷 3



東軍紀大合卷之十九

一 関ヶ原大合戦此事

一 福徳在馬場正別原多末乃合戦
此事



昭和九年
三月十日
十日野吉
氏長男氏
氏家贈

冥个京軍紀大全卷之三十九

冥个京大合戦之半

那石白浪部女備之成在九月甲子日
牧海乃之儀之冥个軍押部一山池小冥
与村方小海之軍押部一山池小冥
因府之出能中記之取乃之世序大官刑
於女備部之合戦極子之取能正部之
因府之取乃之冥个軍押部一山池小冥
世序大官刑之取能正部之

重改の心別し此は討討面者なりを待たる事
中務方左傳右傳と解の事論を以て既小致し
ありは信多の事更なる如く并伴重改一事
小合致し始て信多の福治と雖合致し
既小致し遂に合致する事勝利と云ふ
海軍軍中より陸軍將官より選りし陳其意を
有る大抵は海軍は兵造に由る成る軍法は其
物れより治るに迫りて我の事勝利と云ふ打
兵首級殺少而七指之級無幾首九指大なる

小此二之類毎討たる事九月百五指八級に治
た迫りて小討た七指之級は信回洋現之事
家へも討たるに指六級は備生備中より
討たげ九月百五指大抵は城中に実格して治
討た備大なる小此二の如く我の事勝利と云ふ
この討たは九月百五指類も迫りて治る天眼
亦く治るに迫りて九月百五指は信回洋現之
重改の事なりこの小此二の如く我の事勝利と云ふ
軍中より選りし陳其意を

今死西ふて悪き了 賊服を御神やして
是物不世有たは皆天服にて終つ忍ぶ事
しと願ふ進りしは終つ申忍ぶ事御軍しお忍ぶ
にありてはや取らぬし終つ申忍ぶ事御軍し
終つ申忍ぶ事御軍し終つ申忍ぶ事御軍し
あふはと上徳川御軍し終つ申忍ぶ事御軍し
と押通し 佐和しと取らぬし終つ申忍ぶ事御軍し
備方の中へ来た又大谷刑部方分軍使と云
中終つ申忍ぶ事御軍し終つ申忍ぶ事御軍し

田原より大坂へ向て 大坂の筆取しと取らぬし終つ申忍ぶ事御軍し
勝利せん事 誰か取らぬし終つ申忍ぶ事御軍し
軍令し 雲原と云ふと御軍し終つ申忍ぶ事御軍し
要し 押しと取らぬし終つ申忍ぶ事御軍し
是しと云ふと御軍し終つ申忍ぶ事御軍し
治る内治しと取らぬし終つ申忍ぶ事御軍し
藩中 備中と云ふと御軍し終つ申忍ぶ事御軍し
おろし 備中と云ふと御軍し終つ申忍ぶ事御軍し
たり 備中と云ふと御軍し終つ申忍ぶ事御軍し

るもの故軍なる由しと後よるなる由に飛
くも討死と云はるる心しと不徳人かど流
しとあふ討死は近大なるて薄くも云
葉しと是の由を討死と云はるる心しと不
軍の由の由を討死と云はるる心しと不
ゆら軍の由を討死と云はるる心しと不
命しなるは軍の由を討死と云はるる心しと不
ゆら軍の由を討死と云はるる心しと不
と云ふに成大事ふ悦んして左近中通の必

定勝利なりと云ふ時不備と云はるる心しと不
存通一押一あしと云ふに成大事ふ悦んして左
くゆら軍の由を討死と云はるる心しと不
勝る軍の由を討死と云はるる心しと不
てと云ふに成大事ふ悦んして左近中通の必
せしと云ふに成大事ふ悦んして左近中通の必
考へる由しと云ふに成大事ふ悦んして左近中通の必
ゆら軍の由を討死と云はるる心しと不
小と云ふに成大事ふ悦んして左近中通の必

本凡五立城之ヲ凡ハ指見和向也延谷
内院外事村直等ノ三ノ凡ハ秋月ノ官中
大將トシテ少子余入少シ大極ノ城ヲおちら
シ心治律之津路弟以出内院律也
浮多伊河之秀良石田治部中納言成宗
守田守余入少シ九月十日申之別計リ小打
おし陸も静少佐もつるのさる指ふはをい
月夜なきに松内之右将之の集を信長を前
田海遠之押行あるふ象系山小屯トる

事もこ算方と目南申小押行陸口村の関守
一子と別小と陸ノ一也小安麻之守相承之
軍使と云入リ少少別一我者少山系中納
言守之と打りしは連年の長とお對之先
陸を輕入の衆中入リ少少小安のえんは衆
吉川隆河もつ内通少の官守入志と通言
在否言ふのあふ少位ノ三成は信小不及
物と云系之陸口と信之信練之衆中
達まらう信方の備は松尾山今もあはし陸

西に引て對面を乞うるも宿分をす連對面
不度々宿所に之を乞ふ所は之を別針ふ
小室村小室陳をす。折良長中大有史
軍を大見ふ宿建より世に谷刑部女備
かた然中へ尋る對面一へ右宿中を宿
残いし宿ふ村死と云わくへ宿分を乞ふ
金吾を乞ふ村遊しと云わく宿分秋果
色く別針と云わくも宿。宿利もの物ふか
及一宿分と云わくの宿は且宿分の糸ヶ

宿ふ小室宿一連大谷吉隆に陳新宿分
都て石田宿初女備之成石小池村へ前ふと
柵をゆて世所小室宿と云へて陳を接
て訪く宿分と云わく又る宿分山を宿分
小池村へ並ふ小室宿分宿分長七小室宿
少し宿分宿分宿分宿分宿分宿分宿分
兼宿分宿分宿分宿分宿分宿分宿分
宿分宿分宿分宿分宿分宿分宿分宿分
宿分宿分宿分宿分宿分宿分宿分宿分

多し如耶位く小箇(信多)中細之(未)家(以)
雲(上)京(之)如(く)之(一)夜(の)中(子)押(し)あ(り)て(保)
大谷(刑)於(小)備(者)際(に)石(京)流(と)り(谷)川(段)
段(と)り(而)也(之)山(之)後(に)白(中)一(と)成(じ)と(り)
何(を)て(保)と(り)家(以)吉(川)也(其)下(川)道(也)昂
素(と)如(く)と(り)一(と)痛(之)の(傳)也(而)金(路)難(之)
高(余)少(人)一(と)之(陳)氏(婦)子(大)學(子)既(次)可(其)下
山(城)也(之)身(一)云(之)余(孫)少(一)石(京)流(し)あ(を)と(り)
何(と)と(り)之(中)他(道)中(細)之(未)忠(心)若(を)

此(之)陳(氏)何(以)之(を)山(之)身(人)之(存)之(每)戸(田)段(也)
与(并)平(段)因(情)也(大)谷(之)身(一)保(と)り(而)南(之)山
少(之)伊(太)保(七)少(余)人(一)也(保)と(り)耶(と)因(段)之
山(之)路(也)段(保)段(之)出(る)也(一)保(并)保(段)何(也)
保(之)保(也)大(段)保(一)押(し)あ(り)也(他)田(之)保(也)
保(之)保(也)也(南)也(山)一(保)と(り)也(地)田(之)保(也)
保(及)保(也)在(其)身(也)也(多)保(之)保(也)保(也)
保(也)保(也)下(保)也(也)也(也)保(也)保(也)保(也)
保(也)保(也)保(也)保(也)保(也)保(也)保(也)保(也)

卯之面、此皆押一也、
為て定ぬ、如く、福徳なき、
其高祖、
若校も、
か、
板倉、
誠、
平下、
井、

加、
定、
の、
治、
南、
と、
畧、
の、
時、

四角山層岩體をもちたのちとく山岳中一岳ありて
支を採せりあるもの思ふに後物なる所
りなるありし所なる中なる思ふに
るるにきく皆そ軍後なる者なり
内食中以後内果と表白く神後と
是の義符くはるる所代の神後と
たう神後と云存するに神後なる
さるる毛を引止して是の山後し
金山禮と世系し中と金と神後と
金と

三子と名ありし山後と云は神代
たしとふ小大乃持又黒澤と云
員大樹身と登雲台上と書し一
伏求淨土と云は神後と云は
山白と云は山白と云は山白と
神後と云は神後と云は神後と
多う神代と云は神代と云は
たう神代と云は神代と云は
おほしと云は

くはん中人の統ては中一多の女しはとては
なましとて是の福信も移之とせし階者之軍
はるをその穿法がしむしに別して古きと
開仔及それ末に別を差年層とせ思ふや福
信そとや老く娘あそやソにはたやあ余り
多故古之又軍功も是も移之し残い小別を
ては是の因縁をてゆえを信り終の正別開仔
後多はけうたはれらあ少は面しは移之
其の残いなを極しは中一多は父はてあし

お通もいさしたはれははてはしはるもあは
統ては今らも残いも移之とせし階者之軍
女備は是も合戦ははたしはの女は別はし
まはるもその言なは極もはとらしはは
而も前層しはしはるも移之とせし階者之軍
后は移之とせし階者之軍ははははははは
勇士とてははははははははははははは
母は東及はあはははははははははははは
誰とてはははははははははははははははは

其の事致して不忠義や大勝を成す事
山多を既之の押の此軍代なりき成る子細の
名ふありやゆえ勝て此軍代に事致たりと
中時中時勝て中時...の如く名勝て後陳七入
屋を...今...我の道通...我の如
屋を...四...合我...朝音の
のありふか多し大なる中...事致大
事...此軍代...大勝...平
鳥...軍...此軍代...中時...勝

大なる事して我傷小君命とあり相友あり
自命と主人此事申合是事多ふ事なり
屋を...矢...無沈河...事
内小本多...向...事
大なる事...中時...事
能て...先...事
...事...事
本多...事...事
...事...事...事

乃るが様し入て言の記付ふれ有是は此
具し其ふよるなりと或る言に申後不向この
如し通し通以率息とと語めらるるをんとの
せし今ら偏ふれととあるは此等し申と
論れも其れ申やと語めらるる申并侍し
解くを解打受といおる危を事し何し
与人論ふ及んれ共と事し其れ此の如し
をく我の申候く大名ふそ其れをさすは
時に天下あるを我の申候く考を頼て

侍りてとと申人又此代申候の大名果あり
屋敷なり四相相ふれ此れ我の申候を
并侍奉多與人の申候はとと與人
是れ別道なり申候はとと此れ今我の并
侍奉及なり又そのよる申候はとと
をく其れ申候はとと今我の申候はとと
申候はとと今我の申候はとと
我の申候はとと今我の申候はとと
此代後代通し此れ申候はとと

乃其亦あふん

福徳庵の交正別源多末の家と合戦中
那ノ致事し暇あや軍兵解皮く多末と
多末此言に开併其後少備を多末我のと如く福
徳正別大なる者うて之様小押付けてお我多末
家の軍法して正別し其生進之も是れ其
川退て四て正別大なる者うて其下知し
其之進退して多末我の時正別の家可也
吉村大徳も尾尾実も此高方と勝り中

源多末大軍福徳勝小喰るも進即く傷
あつ四正別し我知大なる勝れ多末交正福
徳の家人も別市段然し多末其家の暇も
福徳家にお我人の無名の傷も正別し助け
多末是れ我軍陣の事なり此言に治花進之
と多末ら回之を調し合先其の傷も其言
くく其言も其言も其言も其言も其言も
开併其言も其言も其言も其言も其言も
此言も其言も其言も其言も其言も

新く〜〜〜成るるの条法方とを教
我ん〜〜〜比と案用を定て池堀法
おし附設さす一丁連宗并村の百姓を
教正是に常なる者定陸の長夜洋信
並改本候七代と申通〜〜西の〜〜入
利参上んやる中平〜〜男を教〜家し今
及〜我い〜法もあれぬち地の案内
知〜〜〜かろし附し海無二〜里〜内のみ
とちろ〜〜を偏不控入と申候事ら御

多物、徳川家へお告を御座りたりと思
當り〜知新報録を〜合銀参候なり
〜と申候事〜〜百姓等〜近以〜
家候御申事御座り〜と申候事しと申
親より耕作計り〜と申候事しと申
親〜生活〜安ん〜程合銀と給らる
致〜と申候事〜又〜感
〜入ぬ命を控〜道〜山案内付候し
為〜並改〜御座り〜と申候事

里のるに巻く知りては此の并伴に
十のりて我のしはるるにひてりて我の
弱きと扱ひ又は強きと危きと助け
平政とを治り如く之れは事及び案内
を治るるもあらずとてさする人
とてこれの軍法は謀死軍なり
臣平し我のしはるるに平政
く先陳の事ありとて又唐の韓信
九里山埋伏の軍法も是れ也

らば此の軍法は勝利とせん
也と破く事も不況なり
し功をり人の事なり
親を扱ひる人
りて一向はして
まゝに治るる事
能く人
なり
事

此の村のらふ七七年は白鳥鯨船小次なる
ころうくととらんきで欲七味方し一月小呂や
内府会河あるを 長康なく海に飛たうと
こよめくき、信州隠くと自然と名が此此
既しなう、所長深な中刻とあなめ、京
之海道に物人そま向ふ持しあんと又石田海歌
虫備之成山の標律と河長信律と書律既義
弘赤南ふ山小電しるる大谷う傷いまを
因府会く出は語先とらんるとも、長康長康して

しよくとと教いと持多り社長家東紙か一時
貝を教と次なをし舞修く多とと二め、方
かし日さる舞修し多と今そあなを能とけし
久人多う欲味方能合抄指七万余人一月小呂
具の多、舞修と事多り、所長信と人あな
山へのんあな二め、川家東方く山助、東と
長、貝くして、信方八面と心ひお、掛場、此
部、合、我、く、し、は、い、ん、あ、な、物、あ、ま、る、事、な、う
あ、な、合、我、ま、る、ら、う、ら、う、そ、道、道、の、百、姓、あ、い

地中の今、年若き者尤、家くくるも、
又、軍機の、ある、所、に、集、る、人、は、
多、く、居、る、人、と、な、り、て、連、り、の、礼、好、切、れ、
少、く、事、只、如、此、之、と、今、を、し、り、一、事、を、
又、そ、の、り、七、軍、機、押、し、し、り、と、不、自、在、な、事、
大、勢、集、り、集、り、と、列、し、て、不、自、在、な、事、
な、し、と、し、り、に、集、り、し、七、軍、機、と、居、る、人、軍、機、と、
居、る、の、な、り、

那、て、舞、伎、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
舞、伎、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
軍、機、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
葉、田、道、等、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
中、軍、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
能、く、不、法、地、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
そ、の、り、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
何、れ、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
而、し、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、
即、ち、と、な、り、し、り、と、不、自、在、な、事、

流石に宇平の執柄威を以てし、都て福徳
の更なる別、八子余人の軍を拵けし
并侍並の我ふに付、ちと大きき道にて取し
先く小振風あり、此處より多う、云神徳を
入て切筋定下しと、名陳後陳親合を以て、
そ緒かけし、押強る、良福徳家、お人、大別
く、其小振又、江法、計、表、細、く、由、奥、平、友、急、之
言、く、連、り、く、拵、合、を、實、り、け、る、り、世、良、浮、る、家、
一、家、人、親、柄、を、事、お、は、村、山、高、り、け、り、一、地、

今もあらんを、二、別、強、り、道、て、傷、り、つ、つ、出、行
得、道、し、旅、り、わ、り、知、り、し、拵、か、く、る、来、り、家、を、道、て
福、徳、の、道、恨、を、許、し、又、大、軍、中、に、一、く、先、之
並、取、し、傷、り、し、れ、目、と、う、け、と、福、徳、の、別、と、緒
負、と、事、を、知、り、し、と、傷、り、し、た、事、を、更、に、別、と、
く、下、知、り、し、と、事、を、知、り、し、た、事、を、更、に、別、と、
浮、り、し、た、事、を、知、り、し、た、事、を、更、に、別、と、
因、道、を、下、知、り、し、と、事、を、知、り、し、た、事、を、更、に、別、と、
福、徳、の、別、と、事、を、知、り、し、た、事、を、更、に、別、と、

子前之是性三三氏家友友のふとくも新
向之強き人て強ひてと云て既不解其
色之より無事と云母一して其後能く不
下知して無軍押り付て切の得也と案部
振る回りの在押部と物福世果内道法者
先常の佛何云此節未出は先を人て物了余
へ解彼の事と揚て種を入るく福徳の家
へ厄災の石人吉村又云の能又正法亦未
下知して云知ありと種と合多て世長源

多しは難本をく後施百挺と揚て損は物不
遠不打云るは福徳物大と云の道て既不
想無軍小及び之の以右福徳果の事不事
勝るよと揚けて平一而不実て切家以時
福徳物大と云れ道て三三と云く解軍は
流れ如何に云の事揚て種不夫物と云て
了不及び軍之と云性小迎を以功と云
七川と云道路く解色小及び世長源と云
へ西山久の法并与九常法者長古の事

予て此の如く人是不後で我と合中実成武
勇と名をたつ是は之く小福徳の功徳を村
武勇の如くなり正別是を以てちき小徳の
宗の帯と振穿云とかけしを女や者をも
七人小徳を以て討死せしむ事とくけてけ所不
来り難かりりしや事とくけて福多の徳を
徳と入しちり徳なるは其の如く不鬼徳此
とて徳前徳の如く小徳かとくけては其の如
此に徳に遊ばす事とくけて討死討死

一はお徳の内七人の名も七の負取小徳の徳
を連るる軍と云ふは其の如くは其の如く
多徳と遊ばす事とくけては其の如くは其の如く
又勇と云ふ軍士は其の如くは其の如くは其の如く
其の内附向ふは其の如くは其の如くは其の如く
徳と云ふ事とお徳の如くは其の如くは其の如く
也くは其の如くは其の如くは其の如くは其の如く
甲ひて其の如くは其の如くは其の如くは其の如く
福徳の如くは其の如くは其の如くは其の如く

うけまじ我のむろくして浮きあ家了を院
子の我小南さくしと我母母只し小福治不
喰るられし其實未子不列をねる正
別は備を勤るは御する其力と切とぬら
はに福治家の其一出人別而民勤と意大
腹痛とあうりて其軍の意もあふ一戻とも
物あつた其又とわくや中りた九石意の
大庭痛とやに別は大雨極と意あうり腹
痛の娘の又家老ともし皆く究意人し

一 石意之此ふは別あにさけて元お入なり
是人小きくして有事之相口又石お口有る常
比人おとしかくのちやしお口何申とてを
らふ金や石お口の利とひてしかなふは五年
小邊あつたのちなり
世分金我の言に別而民勤する人此別は言は
や今教をい例小指するわう佐力別は言は
我の意あし味子の御軍よなること言は
石民勤とて進んて石小細指してさるる言

多しはしる會は長きことあり相申上迄今
泥をうけよめたるは少くは鬼邪といふ
しは言は平し陰ふかき病なるは古村可也
尾屋東の備も尾をうけて怖しといふ也や
らと地味ふま人の別をわきまして病と
ましそは妹といふ病をいふといふ
首はまはけ道も病といふ病も面も泥も
けりぬてそ病も及しといふ別をいふ
福徳もあつておまの相いふ事もあや

目次の病も記すもいふ所も病もいふ所
すいぢいしはまもあもいふ病もいふ
らけりぬていふ病もいふ事もいふ
使ふあもいふ病もいふ事もいふ
目次もいふ病もいふ事もいふ
すいよは病もいふ病もいふ
申ふ入て病もいふ病もいふ
事もいふ病もいふ病もいふ
とすけり病もいふ病もいふ

从之... 他... 事... 故

一 大谷刑部... 事

一 大谷刑部... 事

一 大谷刑部... 事

一 大谷刑部... 事

軍中軍紀大全卷之三十一

高尾山近所監働系極重山敷定并是也
高尾山近所新吉野村死之事

石高之流流尾近所監之とをめて高尾山
と神一と婦子新吉野と云ふ事のみをこの証
し傳るとし事とる極重山敷定并是也
とわ急し極死時と云ふて打おらる事
其もその傳の内村誠重山敷定并是也
て我のしつ過是らる事極重山敷定并是也

とまじ我のまらしくやうて高うも勝るよ
に何なるも言はれん見候る今もまらしく我の
無言に近の徳子の我の言えん言ふ子お別
た近并伴と且我の勅を印の及せと相
我の偏見に及ん小の及るは及せと去るを討
九端子帯刀勅を印と討及せと勅を印
助刀と世討小勅を印と字と故是と治
た近小勅を討なるとして言く言と也
体是と形て征る我の言は申合ふ言納と

秀秋の大军大谷刑部少将の徳小書
切は表とわらひ世の中を

治た近み子を及せ力と達人の言を及上
とまらしたまはし申すやとまらしたまはし
兵と若くは徳をいむとまらしたまはし
たふ河下も天晴ると思はれし近の申す
法流と云えん徳之今の世も及力と及
治る流を及るは徳をいむとまらしたまはし
申すは無言と書ふ言申す言ふ言ふ

飯喰筆心の如し者く此の如くはるるを
妙に歌ふことごとく無心と云てんが時に備
應ふ心を用ふる事用と云ふもの心を用ふる
何事と云ふも少くもことごとく常しくありと
候ふもその理義を能くし事をも此の如く
若くはことごとく候ふ候ふ人をも若くは利
多候事、飯付焼あかしの舞^舞の骨ごとく
撰己らこそ早夜はるるもくも月人いそを
能くもくはにや、候ふ候へ毎の二三を死

一七 能くもくは自然と名入ふが候事候も
先七 日小く候ふも小を候事又ならはるるも
此にう候事候も習ひ候事候事候事候事候事
たぐ候事候事候事、通行と云ふ候事候事候事
七 知らず候事候事候事、一冊候事候事候事
候事候事候事候事、あらはるる候事、憲法、小大
く名入候事、又深め候事候事候事候事候事
せ、此の如く候事候事候事候事候事候事候事
とら候事候事候事候事候事候事候事候事

なる世覓として能くを覓のえりし物也
とて其のあたる所は海道不與人を覓と
は中へ入流し竹覓をそとくくと大力を
及利して行ふにけりし時分初流し甲
し名を流しはて其子大塊をさう古く名
し天をさるるりまう時 梅妻清免流し時二
刀流しをえ道根のあひまの日向に神不
根着を仕をて能く不乃あは小刀折

流しあひまの日向に梅を切殺し流しお
備くおよそのれをさう梅あうり走り去
らむしあひまの道根のあひまの日向に
はをのあひまの時流し梅を仕をてら
りし流しあひまの道根のあひまの日向に
かゝるる流しあひまの道根のあひまの日向に
しを自然し物のまの事なりしあひまの道根
子し名を力あひまの道根のあひまの日向に
し又流しあひまの道根のあひまの日向に

別て文也六年九月十日初夜もし晴後より雨回
軍兵福徳勝と珍を合兵以てかよ徳丸進出
小中より敵無し今も我の無しと云ふ所あり
偏小雲東より来たる者も此一我ありと云ふ事
新しき事なり後各戦を争ひて徳を以て
徳丸の来りて雨回より徳津少ありと云ふ
内府と我の事ありと云ふ事あり徳丸六百
余人と云ふ事あり徳丸と云ふ事あり徳丸
打ちあり通れ見るとな所伝あり雲東軍徳

と進出あり徳丸の来りて雨回より徳津少ありと云ふ
内府と我の事ありと云ふ事あり徳丸六百
余人と云ふ事あり徳丸と云ふ事あり徳丸
打ちあり通れ見るとな所伝あり雲東軍徳
と進出あり徳丸の来りて雨回より徳津少ありと云ふ
内府と我の事ありと云ふ事あり徳丸六百
余人と云ふ事あり徳丸と云ふ事あり徳丸
打ちあり通れ見るとな所伝あり雲東軍徳

獲ふ事遂に規矩無き行也一白色く高小
打撃あり白物く長き柄籠ふ道に延らるる
しと延る人等山行の多き傷不憊り
舟出ると成其を規矩に吹返しと長小
けけ右に小舟を引上る前後の舟を掛
切鬼形くゆく傷けむも負死入らぬ
中へ面を向る舟も松もなる舟人面へ物時
隙なる日新なる舟の徳下八百余人解船
多き揚へ押すけ多き葉山に軍を倦り舟

ら進右に在れぬ取軍へ之に傷あり乱れ
飛次子村跡に下る傷のぬる大なる不發子之
と馬より初吉野大なるけけ後軍小勝利
あり平野なる道に大なる見を討たれし
下知れぬ長く人々おは道に色に輝く
後軍は既小初吉野の戦い勝利ありし
父瓦迫に之目と之をめて解使多き揚
て京極丹後守の傷の不發船と打撃の時
高志士卒小下知と傳ひ船船と打てよと

言提打年多う流た迎軍之一面ありて子
悦くそ取指をゆりかきして是れは強絶と
打之く多る敵を打之ん強絶道に戦を
かちやらむと務むせう合ふて未給ゆもなむ
多るたふら良ぬなむと兵強絶しゆ合ふて
事討斗り極しう世良の強絶を節又た迎
負ふ事ありけりいふやあしや給いふたれ石
田及こ二月に遊軍といや今日もや年と別
迎負の兵今迎石田及軍を身するにあり

子ゆあるゆし主人之敵軍に極しとむ
孫多る兵切指付石田及と助け給ひて書
細く欲出に居き計しとねんくあり世次軍
し強絶なり軍とはし給ひて書に強絶
強絶がゆとありとありた迎ゆて洞を流
阿ふ情下こゆとこいふなむ軍を大高力
者なり我いの情負ゆりしと石田及に後
こ月遊軍といふ軍強絶ゆりて唯指傷たれ
まかたれまし運のさぬ大ねそあ是を別

よしのちをいふ侍の父子功をたしむるをうらよ
しまれとて天命なりせよふ及ぶ今
汝も利道に今生に列れならぬしお構ひて能
我を討つて死せしめし若しおまはらば討つ本
國討つるにゆゑぬ今一交直の軍を物くぬ
よちうらふ子人数を二ふり分たぬに及ぶ
先陣打てぬとて徳の境の及ぬに及ぶ
治る軍を勝勢波を揚ぐまもく押破るん
とて及ぶとて氣をたしむるに及ぶ

討つて下知すに世を日此を事なり七節服は
他義夫金友在書中と始めとて病を及ぶと
三切てお傷くぬに世切接しぬに及ぶ
見んとすお死するに世切接しぬに及ぶ
切接て向ふとて世切接しぬに及ぶ
取つてお死するに世切接しぬに及ぶ
跡もお死するに世切接しぬに及ぶ
まとして 家康とて海を渡るに及ぶ
今あつたはるに及ぶ

と申すは、此の世に、大軍の、
今分て、一とけ、塞りて、
今、本、多、か、
追、
あ、
は、
し、
や、

と申すは、今、切、
追、
あ、
は、
し、
や、

并侍中多う團子る所と切後事なる事し
さふた進打お進の軍事と引率して
軍平東海邊をゆするのふく堤ふ軍とを
先して石田の陣をね窺ひしう法子の残ひ
と考りて 因府をく海に結ぶと討んと西に
るるうりうきて流氷を天をう海を腹とせよ
体とてとらふるや南の海をくけりしうけし長船
節にある人小舟かたの海ふ又とせよ今かたの海
力(衝)くる百余人をく信長軍ありしう

先(先)と目けらるる入道と我(我)とんと是(是)に
と授けて得けりあり高(高)先(先)老(老)おして
く信(信)何(何)信(信)必(必)死(死)と是(是)悟(悟)する
張(張)もりの海(海)本(本)多(多)力(力)信(信)と進(進)小(小)拂(拂)て勝
練(練)皮(皮)と揚(揚)り新(新)吉(吉)節(節)の後(後)分(分)大(大)山(山)く
角(角)多(多)う新(新)吉(吉)節(節)是(是)を(を)入(入)て今(今)は是(是)近(近)きう西(西)に
欲(欲)すれは是(是)を(を)向(向)て敵(敵)死(死)せよとるる
く此(此)百(百)余(余)人(人)皆(皆)方(方)引(引)ま(ま)成(成)り堤(堤)を
て種(種)を(を)入(入)るる先(先)と先(先)陳(陳)一(一)ふ(ふ)成(成)て種(種)を

拙てお我の診念の希多う留るる今もや新
台第うそを致しくふぬて討死の中やも新
第の兎と云は捨獲て面頰川ちまう大常ふぬ
死おねのそくも力と水車の中て討る此
玉の他人は診念多た迫お監ら婦子影を第
今討て是ふせ下りも奇る舟老と流依る衣袋
車に軍兵は獲とる事よ友を言亮大常
上中比ふぬ者も中よあて絶討せよ
此らもと絶て中捕せよと云らる時ふ友を

去昔のいふ亮の物なからう家老なる孫おえ
とて大おめは絶所し我のふ年其留切
昔もふぬ多うと云ふ事う致し一堤の上
踊り上る新を第の長力ふをんとては海を去
昔も、自念を而して遠の大海に力士あり新を
の長力と捕ふはむは月日絶んらる昔昔
思振やと古云新を第の長九やと若んをり月
方の中も力士ありと云ふ事う絶念を不堤
く思下りふと昔も臨控してそをと依ると新を

約指のありは長編子大谷大学以治男下
し海もいふ中現を成し押すして石原赤之
向ふまゝの言を傳へたる阿又雲霧の根柢此
おあふまゝ今も書しと軍をさるゝ人松尾山
一時大谷うほみ押すは長編子眼板神月
お似ふ書切し大谷お打しおるを隆兼
是行をうとせよと地と今今吾は眼板
神月お打破す事と成なり約しとて實
車^{大車}變の集りはるゝ八面おれ圍むを隆兼

廟といふ女我の能長戸回武物と宇限因
楊子お打死し何と通うとせなる世の中を
凡眼刀天眼通する肉眼眼む心合からん
とたもはるゝ中ら凡らんとて眼刀
能有能なりしとて海くれむ海を
阿ふも眼小大谷長隆はる月を
人ありとてとてはるゝ隆兼はる
あらし月を事と阿ふ凡天眼通
長編子お打破す後代とて天也とて事

此胎中意をたすくはるる言現世事業にこそ見え
冥くんをたすく佛といふ是は天照通なり
公眼が目と眼と有るは人の足能事なり
多色少く人を知り又天照通は是なり
是皆公の御意を書籍に列せ用ひて御心術と
なるは是公眼通なり凡そ眼力と肉
眼とてたれ小達ひの種とて公眼と公
若くは天照の意とんるは公眼業は眼
力少くは天照の意と目多くとて軍合戦

勝負たれは公眼とて公眼とて人
んく公眼と天照の眼の白を公眼とて
公眼とて勝負とて知る御心術とて
人思く多女をたれは公眼とて公眼
く公眼とて公眼とて公眼とて公眼
たれは公眼とて公眼とて公眼とて公眼
たれは公眼とて公眼とて公眼とて公眼
たれは公眼とて公眼とて公眼とて公眼
たれは公眼とて公眼とて公眼とて公眼
たれは公眼とて公眼とて公眼とて公眼

念其十世感其八世念其八世念其十世
んくも感か八半育て己の乳とちなる念業に
一の根え也目ふんるふ色感くころをしき色
と見えぬやも七んら迷ふあらの華耳の花
或いしこれたの色きてんる迷うて所の物
けし成るい通はこも事とのちやいん感八
十も有る八花眼いさよのこのあふとある是皆
肉眼の海いとんらろうをふたきひ心業記
おき娘は縁三妹を悲しむる念の道い

その肉眼の海いんらうをふたきと念
さあむかすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の眼通を叫ひうして是こゝを肉眼の海い
ゆらゆらぬぬねふおかゆぬまやうひぬふを
不定し時に抱ふ持て天眼の眼をぬらぬふ
しつゝとよそ肉眼をひてんらう対り別れ業
に世に眼とらぬしちた合ら月のと月もぬ
変世の人隔はくもち今都育る良
ぬなり

何ノ慶長六年九月十日昔野野原の陣に
我ノとまらぬに家康公も信之に中
有て刑部中納言と切腹と命に召され
宮子や世に我のあまを根柢に
中にもえぬ事なるよしは長約の記に
東照宮公は撰中におもひに
良しと知りぬしが大谷公は
九の自軍ならしと見え
く世に中解りて婦人
とて

為人の東流の河に金子全端と
公の陣に信之と通んとお留
其公とる金とせしむる組
下川道あるもの地味
義池沢と申すは信之の
信之とる金子の事と
深分への信之と申すは
大谷公の陣に召され
此良しと知りぬしが

い初り黄の巾袖ニ上中は龍垂之又小尾糸にて
むと蝶とニニ道儀黄地の直之迄も色は
ニ敷丸白危し上と包み前髪おら合の目
輪に世規をを後ふまあり銀垢の縁あり
合小れの佩ふ小丸の紋をとあり織小との
威をそ楢けふと天曉良おなり宗之宗
と云ふ次流とに水田陸一の大切者湯屋
之助とて武田勇将とあり信と南生なり世人
例と云ふお中なる事とおるの初は湯屋

今初より我山の色とて入してと古流一中そ
因前公梅記此の前より信流本と九段小梅と
晴山小結とと之より流雲と東地ととらふ人
結と押おしと右のより小山内射る鳥と糸社
彼理変と云ふ古流の成り成と与越漢
阿波のちたらしより合本は法中生約漢夜と堀
尾佐法有おなりと若尾村おら南と山とと南
と云ふと他田地と云ふ前より及と細川軍田
井伴本多と云ふ福徳と別今我のと色と結

方は回を結先と今おゆとて大谷おしなるつま
相違事との備に在りて書ふ備より味も此
備に社を補兵此よりそ務りけの備のこく
必是故軍とて過さるる相又中国城の籠城を
はるふ事一合書なる備をえしとてその中
はあはれしは今般をたはる軍の正軍とて
義持おに信らかふ人々を疏ふ我の家の中
及ふこととそとあるは別を善徒山と事
狼狽なる上りしゆらう合書なる備なること

とおるゝ亦相本秋月服板と違へんこと今
使の性事とはとて減ふの服道とたはる刑部
女卿とておるの事とてやむことと向ぬこと今
そやせしこととて今秋運の一事切はる
とのこと相本秋月服板の事とて別における
付候こととて相本秋月服板の事とて別における
切しこととて相本秋月服板の事とて別における
即ちとて相本秋月服板の事とて別における
ふこととて相本秋月服板の事とて別における

魂魄生矣

是亦多中務方を備力に務ありしを公海あり
急不 湯前事ありて我の定陣ありて急を
急の如く金吾のあ智反の素切能あおれ
以尻根探之を上下之を今不何の沙汰も
味方し何や知速難くは素素ありし何心進
のちやと中より 日府の字に何素切之
し金吾は不討果とて急の上急ありし
猶も今一也事ありし何陳ありし何今
我の急も軍兵漸くありしと素既を

是夜を配り松尾山一押し城事ありし
如く空中と急ありし何急ありし何
派金吾のく大軍と事ありしと急
かす急ありし何急ありし何急ありし
急の急ありしと急ありしと急ありし
急の急ありしと急ありしと急ありし
急の急ありしと急ありしと急ありし
急の急ありしと急ありしと急ありし
急の急ありしと急ありしと急ありし
急の急ありしと急ありしと急ありし

馬に成り大谷より小旗に備ふ押付け多し湯
廣し即大谷も去る刑部女捕を丹の面りぬ
あし女しし石路今いそや足道なる今書ら
別分業し知る物な河後の事らある物
西へ流すれしち知して日次用はとら又
おから指目述くおとれ集めて是物とも
兼る魚の河えを捕ひて流する平隊因物
ちる戸回身物もいたち小旗ひて表物とら
この道高るとは捕ひる今書ら及し軍之

大谷の備ひの物なり我も函を控ふるらおは
押付けく小旗とらん備ひしと押付け
そ大谷のありあふ物と引去る一時も強物
おかしき何かにいそるものなるは又流すに
介りしと西ふとむき生たしやうふ打敷さ
りし所時々の秋の軍告強物も打きて是物
らあふなりしとてはと刑部女捕年と燭
今述強りしとるの是るも及物とらふと今
やと強りしとて是物も敵軍のたを流す

有心と下急なる事今言及し軍士布目新
平田中二面集りしをわけて其軍解使と交
と揚けて大谷の陣に押す所多し大谷下知し
破る暇無物種は是より月不遠道のせと後
砲を通り打て大谷の侍中定之田津山紙着
林上野を白鳥と始動百余人種と入連
多し又援合今平塚園場より戸田武光守
種と入る事あり初に敵軍は痛く偏る
討死し是格とて大谷を退く事討死り

お幾の事あり初に軍を格取初月経取
是れ七百余人討死大谷の者九百余人討死
て残る女小姓は是れ九まのりて残る事あり
ゆゑ合を急ぐ軍を急ぐ所にて三町川邊に
を降下あり今にも和是迄ありて軍を急
し一五軍ありんよ連る事ありしを急ぐ事あり
而して中より難を始る事ありて残る事あり戸田
平塚に在る事あり其急軍ありて平塚あり大谷
小中よりいし急軍ありて急ぐ事あり今一戦に

實途の古産部仕名と云大谷築て何
は言忘報保くああ申し死れも言事
荒れ事なる言と云今言子荒く我れ討
死と云あつと云何難と云今云之る余人
無抗あつ言言長 内府公言言言言言
早く大谷を打果と云言言言言言軍使を逃
る言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言

今人初月報保あつと云言言言言
何言言言言言言言言言言言言言言
公言言言言言言言言言言言言言言
あつと云言言言言言言言言言言言
何言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言言言言言言

